

浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

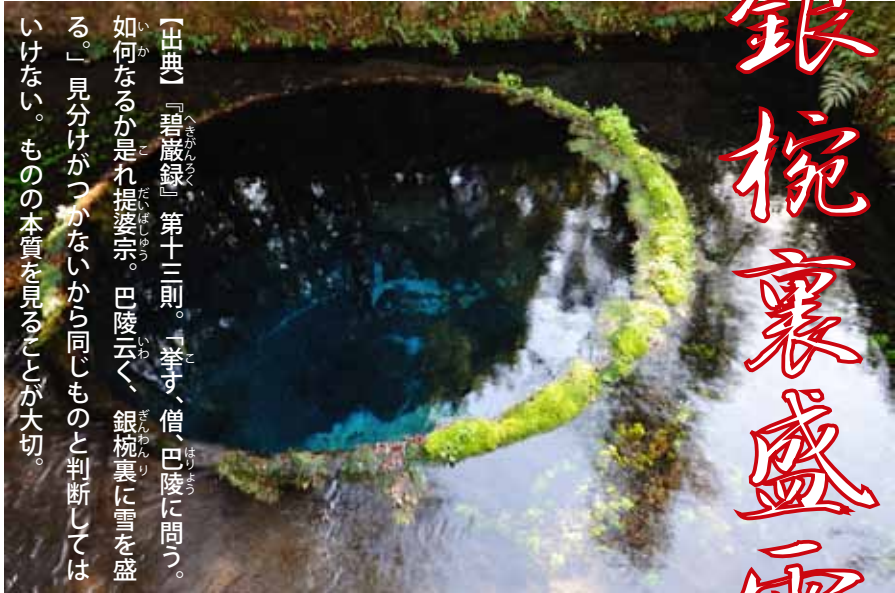
<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/> ナモの寺 検索
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第314号
平成21年12月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp



銀椀裏盛雪

【出典】『碧巖録』第十三則。「拏す、僧、巴陵に問つ。如何なるか是れ提婆宗。巴陵云く、銀椀裏に雪を盛る。」見分けがつかないから同じものと判断してはいけない。ものの本質を見ることが大切。

柿田川湧水 撮影：超空正道

白馬が
白い蘆の花の中に
入るがごとく

明月が
白鷺の姿を
蔵すがごとく

銀椀の裏に
雪を
盛るがごとく

しつかりと
見極め
目を懲らさないと
見えないものがある

心の目も
しかと開き
違いを見逃すなかれ

そして
ゆったりと
全体を見渡すがよい

銀枕裏盛雪

最近、似たような事件が相次いで報道され、テレビのワイドショー番組、週刊誌などでも話題になっております。

埼玉県警が結婚詐欺容疑で逮捕した東京都豊島区の女(34)の知人男性2人が、5月と8月に相次いで不審死を遂げていることが27日、捜査関係者への取材で分かった。いずれの遺体からも睡眠導入剤が検出され、うち1人は練炭自殺を装って殺害された疑いもあるという。県警は女が何らかの事情を知っている可能性があるとして捜査している。(10月27日毎日新聞)

鳥取県内で今年4月から10月にかけて、男性3人が相次いで不審死し、いずれの遺体からも睡眠導入剤の成分が検出されていたことが分かった。3人も県警に詐欺容疑で逮捕された鳥取市内の元スナックホステスの女(35)

と接点があり、県警は女が3人の死亡と関係がある可能性もあるとみて調べている。女の周辺では他にも数人が死亡しており、死亡した人たちには多額の保険金がかけられていたとの情報があるほか女が借金を頭を悩ませていたとの情報もある。(11月5日毎日新聞)

これらの事件の実態はまだ明らかになつておりませんので、どのような展開になるかは未だ不明です。しかし、多額なお金特定の女性に渡つた後、何人かの男性が不審な死を遂げているということは、共通して事実のようであります。

およそ詐欺というものは、騙そうとしていくわけですから、本物よりも本物らしく近づいてくるから厄介であります。結婚詐欺の場合、おいしいものを食べさせ、優しく振る舞い、恋愛感情を起こさせ、

せ、お金を騙し取るというものですから、その罪は重く、それが殺人にもつながっているとすれば、なおさら許し難い犯罪といえましょう。以前、このような事犯は、加害者は男で被害者が女性というのがほとんどでしたが、やはり、世の中は変わってきているのでしよう、手口は異なるものの性差はなくなつてきているようです。

騙す、騙る、欺く、偽る、まやかす、担ぐ、誑かす、陥れる、罠に掛ける、詐欺、欺瞞、瞞着、ペン等々、人を瞞すという行為の表現は、驚くほどたくさんあります。そのことから、人間の罪業の深さを感じられずにはおられません。騙される側にも、どこかに隙があるのも確かであります。そこで、その隙間を埋める言葉として、今回は、「銀枕裏に雪を盛る」

を提示させていただくことにいたしました。

白く輝く銀椀に、真っ白な雪を盛るといふ、爽涼感ある視覚的でとても美しい言葉ですが、『碧巖録』十三則「拳す、僧、巴陵に問う。如何なるか是れ提婆宗。巴陵云く、銀椀裏に雪を盛る」を典拠とする禅語であります。

提婆というのは、二〜三世紀頃の南インドの僧で、大乘仏教の祖、龍樹の弟子となり、師の説く空の思想を究め、弁舌に長け、他学説を鋭く論破したため、恨まれて暗殺されたと伝えられています。その宗旨についてある僧が、巴陵和尚に質問し、その答えは「(仏教という) 白い銀椀に白い雪を盛ったようなものだ」でありました。

この部分の著語(短評)に、**悟克勤**(北宋の僧)は、「**白馬蘆**

花に入る」という表現を使っています。また、**洞山良价**(唐代の僧、

曹洞宗の祖)の『**宝鏡三昧**』には「**銀盃に雪を盛り、明月に鷲を蔵す**。類すれども齊しからず、混ざれば則ち処を知る」とあります。

仏教の目的のひとつは「智慧」を磨くことにあります。弘法大師の『**即身成仏義**』に、「智とは決断簡択の義なり」とあり、「智慧とは、単なる分別、選択を超えたところにある、絶対なるものを選び取る、自ら決断する力である」というのです。一方、禅宗三祖の鑑智禅師の『**信心銘**』には「至道無難、唯嫌揀擇」とあり、「本當の道に至るに何の難しいことはない。ただ、選り好みを止めればよい」とあります。

つまり、究極の智慧は、真実を突き詰めるために、選びに選び尽

くした後に、分別の思いを手放し、選ぶことを止めるところまで要求されるのです。

たとえば、人間には、騙す人間、誠実な人間がいるとして、それを判別する智慧がないと、賢い人間とは言えません。しかし、人間を、悪人と善人と二つに分けただけでは人間を理解したとは言えません。まるっきりの悪人、善人というものはなく、善人が悪人になる場合もあり、またその逆もあり得るのであり、その意味で、善人、悪人という実体はなく、「空」なのです。更なる、人類愛を唱えるとなれば、善悪二つに分けたものを、改めて一つのものとする「不二」如「でないといけないのです」**「銀椀裏に雪を盛る」**は、その「不二」「空」の妙なるところを見事言い表す言葉といえましょう。

◎暖簾のれん

「暖簾」は、その形状を示すことばであると同時に、信用度を表すことばになっているが、もともとの発祥は禪寺。

今、暖簾はアクセサリーのイメージが強いが、本来は実用品。禪寺では、冬でも暖房が充分でなく、終始隙間風が吹き込んできた。あまりの寒さに耐えかね、僧侶たちは前門や後門をおおう垂れ幕をつげざるをえなかった。つまり、暖をとるための簾すだれというわけである。

これが一般化し、家の入り口や部屋の仕事りに用いられるのだが、やがて商家の店先の風除けに使われ、ついではかり、商標、屋号を染め抜かれるようになる。これが江戸の初期のこと。以来、暖簾イコール店となり、「暖簾を

傷つける」は、店の信用を失うことであり、「暖簾分け」は奉公人に支店を出させること、ということばにつながる。

しかし、「暖簾に腕押し」は、フワフワした布の形状から生まれ、たことわざで、力を入れても少しも張り合いがなく、手ごたえがないありさまを意味する。

ちなみに、赤提灯ちまうちんの居酒屋でよく見かける「縄暖簾」は、蠅はえが店内に進入しないようにと考えられたもの。

（『仏教のことば』早わかり事典）

雑記

▼お礼&ご報告

かねてよりご寄付をお願いしておりました鑿子きんすと、



鑿子台きんすだいが納入され、早速、御本尊様用として使用させていただいております。鑿子は、一枚の板から叩きあげて造ったもので、さすがによく響き、よい音がいたします。

以前のものは、観音様用に、観音様のは位牌堂へと、それぞれ配置換えをさせていただきました。

また、新たに次の方々からご寄進賜りました。本当にありがとうございました。敬称略、低頭。

◎村瀬徳雄 ◎藤井二左子

◎日比みち (以上一万円)

▼版画カレンダー

今年も新しい暦をお届けいたします。いつもどおりのことができ、無事、年越できることは幸せです。皆様も良いお年を……。

◆体癒えいつもどおりに

年の暮れ 沐魚